

令和 5 年 6 月 26 日現在

機関番号：14301

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2019～2022

課題番号：19K00907

研究課題名(和文) 英語教育における諺の活用 音韻・文法・文化理解の総合的指導法の開発

研究課題名(英文) English Education and Proverbs: Towards Development of a Comprehensive Teaching Method by Sound, Grammar, and Cultural Understanding

研究代表者

桂山 康司 (KATSURAYAMA, Koji)

京都大学・人間・環境学研究所・教授

研究者番号：10194797

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,100,000円

研究成果の概要(和文)：日本人が母語である日本語独自のリズムから脱却できずに、日本語のリズム感を保持したまま、英語に取り組むことが、英語教育の成果が芳しからざる遠因となっているとの認識から、英語固有の強勢に基づくリズムの体得を目指す教育プロセス並びに教材の提言を行った。具体的には、英語の強勢によるリズムを日本語母語話者に体得させるための教材として、ことわざや詩の特質を考究、それを明らかにし、日本並びに海外の学会で発表を行った。その成果を含む、長年の研究が認められて、アイルランドに拠点をおく学会より、2022年度ジェラード・マンリー・ホプキンス学会賞を受賞した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

日本語と英語との、リズムにおける根本的相違に着目した、日本人母語話者のための英語教育が、日本の初等・中等教育においてまだ行われていない状況にあって、その教育モデルに基づく教育プロセスの効用について、期待される基礎的、原理的な効果を明らかにした。さらに、その実践に向けて、現在、新たに提案されている、英語教育上の上位モデルとしての「意味順」に着目、このモデルとの親和性を明らかにすることによって、現在、浸透しつつある「意味順」による教育実践に、リズム教育を統合することで、今までの読解に重きを置いた受動的な教育から、発信力を育成する能動的な教育への転換を図ることに寄与することが期待される。

研究成果の概要(英文)：Due to the recognition that Japanese people often struggle to break away from the unique rhythm of their mother tongue, and therefore fail to achieve a proper sense of rhythm in English, it has been proposed to incorporate education processes and materials that focus on the stress-based rhythm unique to English. Specifically, by studying the characteristics of proverbs and poetry in English and clarifying them, educational materials have been developed to help Japanese speakers acquire rhythm through stress emphasis. The results of this long-term research, including these achievements, were presented at academic conferences both domestically and internationally. As a result, the researcher was awarded the 2022 Gerard Manley Hopkins Society Prize in Ireland.

研究分野：英語教育

キーワード：意味順 英語教育 リズム 英詩 英語教育モデル

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

第二言語習得理論では、インプットとアウトプットをつなげる学習者の「気づき」を促し、インテイク(内在化)を促進させる指導法の重要性が示唆されている。そこで、音声、表現、内容面で優れた特質を持つ諺に着目し、音韻意識の育成・文法の使用・文化の探究までを含む総合的な英語指導法の開発と効果検証を行うことを通じて、使えることに集中する英語学習法(ESL)と、内的理解を促進する教養の育成(EFL)が混在する外国語教育をひとつにつなぐ外国語教育の在り方が求められている。

2. 研究の目的

近年、日本の英語教育では、「授業は基本的に英語で」など、求められる英語力の高度化が起こっている。一方で、英語学習に苦手意識をもつ学習者も少なくない。よって、個別の音韻・文法・文化指導を、学習者が自身でどう統合していくかが課題である。第二言語習得理論では、インプットとアウトプットをつなげる学習者の「気づき」を促し、インテイク(内在化)を促進させる指導法の重要性が示唆されている。そこで、本研究は、音声、表現、内容面で優れた特質を持つ諺や諺的表現に着目し、学習者の「気づき」を促進する効果、および英語の技能面と情意面に対する学習効果の検証を行い、日本人英語学習者を対象とした、英語の諺を用いた音韻・文法・文化理解の総合的な指導法の開発への道筋を示すことを目的とする。

3. 研究の方法

研究課題は以下の3点である。(1) 英語の諺は日本人学習者への教育的観点からどのように分類・整理・体系化され、従来の日常会話の例文と諺や詩的表現の例文による記憶や気づきにはどのような違いが見られるか。(2) 諺や詩を教材にした指導により、学習者の英語力・技能面はどう変わるか、また情意面(苦手意識、自己効力感、動機づけ)はどう変わるか。それに、(3)ことわざと共通した言語特性を持つ、より高度な表現形態である詩は、発展的教材としてどのような特徴を有するか。

まず、諺を英語教育に活用するための予備調査として、英語の諺や詩的表現を各種文献から収集し、日本人学習者の英語学習という観点から整理する。合わせて、音韻・文法・文化理解に関する、国内外の先行研究についてリサーチを行う。諺の収集・整理、先行研究のレビューについては研究代表者と分担者が共同で実施する。

次に、諺を用いた英語教材の開発を行う。音韻・文法・文化理解を総合的に指導するという観点から、諺を中心に据えた教材を開発し、指導法についても共同で議論する。最終年度の実験授業の実施に向けて、研究代表者が、本務校において大学生を対象に予備調査を実施する。加えて、開発した教材と指導法を検証し、成果発表を行う。研究代表者と分担者の本

務校において調査協力者を募り、大学生を対象とした実験授業を実施し、諺を用いた英語教材と音韻・文法・文化理解の総合的指導法の効果検証を行う。実験授業は研究代表者が行い、データの整理と分析は分担者が行う。検証結果を国内外の学会で口頭発表し、論文執筆と最終報告書の作成を共同で行う。

4. 研究成果

国内外を問わず、英語教育、英文学にかかわる学会に精力的に参加し、情報を収集すると同時に、現在の研究成果を問うことで、今後の研究の達成への足掛かりを得た。具体的には、広島で行われた日本英文学会全国大会、アイルランドで行われたホプキンス国際大会、福岡市で行われた JACET 東アジア英語教育研究会に参加し、特に、広島での名古屋外国語大学田地野彰教授の講演からは得るものが多かった。そこで得られた知見に基づき、「意味順」のリズム教育への活用を迫る研究発表を、その後、JACET 東アジア英語教育研究会にて「大学英語への英詩研究者からの提言」と題して行った。その際、田地野彰教授の提唱する「意味順」モデルが、単に、英語の意味やシンタックス理解ばかりではなく、音声面（リズム教育）にも適用できるものであることを指摘した。

また、英語教育、英文学にかかわる学会での情報収集は継続的に行い、具体的には、オンラインによる日本英文学会全国大会並びに関西支部大会、JAAL in JACET、および JACET 第 3 回ジョイントセミナー（第 47 回サマーセミナー&第 8 回英語教育セミナー）に参加した。この間に、本研究課題追究において得られた知見 英詩研究におけるリズム概念の追究が、英語教育モデル構築におけるリズムの果たす重要性、並びに、日本の英語教育の根本的課題を浮き彫りにする をまとめた論文「5 文型から「意味順」へ 英詩研究者の視点」が、『明日の授業に活かす「意味順」英語指導：理論的背景と授業実践』（田地野彰編、ひつじ書房、2021 年）の第 13 章として公刊された。名古屋外国語大学の田地野彰教授の提唱する「意味順」モデルが、単に、英語の意味やシンタックス理解ばかりでなく、音声面においても有効であること、そして、英語と日本語のリズムの相違をわかりやすく説明したうえで、その相違の体得こそが、今までの日本における英語教育において決定的に欠如していたものであると指摘したものである。この教育上の欠陥を補う教材の作成が喫緊の課題となったが、コロナ禍により、当初予定していた、対面による実験授業による調査研究は断念せざるを得なかった。一方で、その不備を少しでも補うために文献上の研究探索を強化した。

なお、本研究課題に関係する英語教育、英文学に係わる学会への参加は継続的に行った。具体的には、オンラインによる日本英文学会全国大会および関西支部大会に参加し、最新研究についての情報収集を行った。（ただ、コロナ禍のなか、発表を予定していたアイルランドにおけるホプキンス国際学会が中止となり、また、JACET 東アジア英語教育研究会における共同研究発表が延期となったことにより、重要な研究発表の場が失われたことは残念であった。）

日本人が母語である日本語独自のリズムから脱却できずに、日本語のリズム感を保持したまま英語習得に取り組むことが、日本における旧来の英語教育の成果が芳しからざることの遠因となっているとの認識から、英語固有の強勢に基づくリズムの体得を早期に目指す教育プロセス並びにそれにふさわしい教材開発の提言を行った。特に、英語の強勢によるリズムを日本語母語話者に体得させるための教材として、ことわざや詩に注目、その特質を考究、英語教材としての適性を明らかにし、日本並びに海外の学会で発表を行った。具体的に、国内では、「文学とは何か、詩とは何か：分析から総合へ」(愛知教育大学令和4年度学術講演会)において、科学的言語理解に基づく通常の音声指導とは異なる、「詩とは何か」と問いかけることから始まる音声指導(具体的には、リズムの体得に始まる音声指導)

分析的科学知(logos)に対して、総合的物語知(mythos)のもつ直覚的理解を優先する言語習得について、理論的背景から説き起こし、初等教育にも適応され得る音声指導の実際について、その見取り図を提示した。また、「翻訳と外国語教育 英詩研究者の視点」(名古屋外国語大学第28回英米語学科・ワールドリベラルアーツセンター共催講演会)においては、詩とは何かを考える上で一番厄介なのは、詩が、ベンヤミンの翻訳論によってあぶりだされた、本質に向かい上昇する(aufheben)動き 本質に対する眼差しと、フロストの詩観に代表される細部へのこだわり(localなものへの愛着)の両者に引き裂かれている点であり、それこそが、詩の全体性と細部に対する、徹底的なこだわりの結果(表れ)であって、このこだわりこそが、詩的表現の根本に横たわるものであるとの認識から、詩教材の有用性について論じた。また、「大学英語教育への英詩研究者からの提言」「英詩の効用：外国語教育としての英語指導」(東アジア英語教育研究会)では、大学教員ばかりではなく、英語教育全般において、詩の活用が日本人向けの教養教育の現場において、有効であるとの認識から、英語が不得意な、自信のない学生 例えば、大学教養課程の再履修クラス にこそ、英詩を活用した教育法は効果を発揮することを実際の教材の具体的な活用の事例に言及しながら、教材としての英詩の有用性を論じた。更には、「和歌の英訳から考える言語と文化」(京都大学大学院総合生存学館国際開発研究会ワークショップ)では、研究成果の披露に加えて教育実践を行った。海外では、“Lyric Egotism in Hopkins,” “Rhyme and Hopkins”と題して、アイルランドにおいて開催された国際学会であるジェラード・マンリー・ホプキンス学会において英語にて発表し、詩人ホプキンスの詩的達成の一端を明らかにした。結果、その研究成果を含む、多年の研究並びに学会への貢献が認められて、2022年度ジェラード・マンリー・ホプキンス学会賞を与えられるという栄誉に浴した。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計8件（うち招待講演 4件 / うち国際学会 2件）

1. 発表者名 Koji Katsurayama
2. 発表標題 Rhyme and Hopkins
3. 学会等名 The Gerard Manley Hopkins 34th International Festival (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 桂山康司
2. 発表標題 文学とは何か、詩とは何か：分析から総合へ
3. 学会等名 愛知教育大学 令和4年度学術講演会（招待講演）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 桂山康司
2. 発表標題 翻訳と外国語教育 英詩研究者の視点
3. 学会等名 名古屋外国語大学 第28回英米語学科・ワールドリベラルアーツセンター共催講演会（招待講演）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 桂山康司
2. 発表標題 和歌の英訳から考える言語と文化
3. 学会等名 京都大学大学院総合生存学館 国際開発研究会ワークショップ（招待講演）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 桂山康司
2. 発表標題 英詩の効用：外国語教育としての英語指導
3. 学会等名 東アジア英語教育研究会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 Koji Katsurayama
2. 発表標題 Lyric Egotism in Hopkins
3. 学会等名 The Gerard Manley Hopkins 32nd International Festival (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 桂山康司
2. 発表標題 抒情詩における「私」 lyric egotism再考
3. 学会等名 日本英文学会関西支部第14回大会 (招待講演)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 桂山康司
2. 発表標題 言語技能と教養の融合を目指して 英詩研究者からの提言
3. 学会等名 東アジア英語教育研究会
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 田地野彰、桂山康司、金丸敏幸、川原功司、高橋佑宜、笹尾洋介、奥住桂、藤木克哉、山田浩、佐々木啓成、村上裕美、加藤由崇、渡寛法	4. 発行年 2021年
2. 出版社 ひつじ書房	5. 総ページ数 328
3. 書名 明日の授業に活かす「意味順」英語指導	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	渡 寛法 (WATARI Hironori) (20732960)	日本大学・文理学部・准教授 (32665)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------